灯明の明かりで幻想的な雰囲気に包まれた節信院の境内

玄洋

館　報

玄洋117号

平成26年1月1日

発　行

社団法人　玄洋社記念館

郵便番号 810-0062
福岡市中央区荒戸三丁目
6-36 西公園ハイツ201号
電 話（092）762-2511
FAX（092）762-2502

司書公の菩提寺節信院

山門を地域に開く

行事参加やジャズ演奏会

黒田藩の勤皇家家老、加藤司書公の菩提寺「節信院」（喜納浩一住職＝福岡市博多区御供所町一一）は、地域行事への参加や独自の催事の開催などで地域との結びつきを深めている。「お寺であっても、皆さんが仏事以外でも訪れやすい場所でありたい」というのが喜納住職夫妻の願いだ。（3面に関連記事）

境内は、地面に並べられた灯明の、ほのかな明かりが描く模様で幻想的な雰囲気に包まれていた。大勢の見学者が訪れ非日常の美しさと厳粛さを感じていた。

博多区の町おこし団体が主催して、昨年十月十九日に開催された、同区内の歴史的な情緒を残す寺院など九会場を灯明の明かりで演出する「博多灯明ウォッチング」に節信院も参加して地域振興に一役買った。

節信院は同月三十一日から十一月四日までの、寺院など十施設をライトアップする同じく町おこし行事の「博多ライトアップウォーク」にも協力した。

十一月十三日から二十四日までは、節信院の企画で絵画とアクセサリー作品などの個展が開催された。その間の十八日午後零時二十分から四十分間。本堂にジャズのメロディーが流れた。演奏するのはベースの間村清さん（44）、ピアノの塚本美樹さん（48）夫妻、それにボーカルが娘さんの間村日南子さん（12）で編成するバンド「VISIONS」。夫妻は腕前も一流の演奏家だ。

この〝昼下がりのコンサート〟は喜納住職と知人の発案で始まった。毎年春、秋の開催で、今回は七回目。約三十人が鑑賞した。

近くの会社に勤める人たちが、聴きに来てくれるだろうという予想でスタートしたら、近所のお年寄りもやってくるようになった。

「昼間のお寺はだれもいないが、それだからこそ、ほっとする空間。地域の皆さんに親しんでもらいたい」―と住職夫人の弘子さんはいう。

本堂にジャズが流れる〝昼下がりのコンサート〟

玄洋社憲則

第一条　皇室ヲ敬戴ス可シ

第二条　本國ヲ愛重ス可シ

第三条　人民ノ権利ヲ固守ス可シ

今号の主な内容

▽「中野正剛先生顕彰祭」を齋行＝2面
▽新連載「筑前風濤録」＝2面
▽司書公と勤皇党諸烈士を追悼＝3面
▽本の紹介＝4面
▽「和楽路会」参詣旗を寄贈＝5面
▽「賛助会員芳名録」＝5面

中野正剛先生没後70年

ご遺徳しのび顕彰祭

没後70年で中野先生の足跡に思いを新たにした顕彰祭

憂国の士、中野正剛先生のご遺徳をしのび、顕彰する「中野正剛先生顕彰祭」が昨年十月二十六日、福岡市中央区今川一丁目の鳥飼八幡宮で斎行された。主催は中野正剛先生顕彰会。

昨年は、中野先生が東條英機首相の退陣を図り、昭和十八年十月二十七日に自決されてから満七十年に当たり、例年に増して意義深い顕彰祭だった。同顕彰会会員はじめ中野先生の崇敬者ら約四十人が参列した。

同八幡宮境内の中野先生銅像前に祭壇が設けられ、山内勝二郎宮司によって祝詞奏上、玉串奉奠などの神事が滞りなく進められた。

終わって同顕彰会の吉村剛太郎理事長が挨拶に立ち「十月二十六日のこの日に中野先生は拘束された憲兵隊から帰宅された。何事もないように家族と夕食を取られ、そして、その夜、割腹された。常人には考えも及ばない、すさまじい気力といえる。昭和十六年に太平洋戦争が始まり、中野先生は昭和十八年から和平工作に走り回ったが、東條に妨害された。和平工作が、もう一年でも早ければ多くの戦死者が出ることもなく、また原爆の投下も避けられたと思う。中野先生の行動は永遠に忘れてはならない」と参列者に訴えた。

神事の後、会場を同八幡宮参集殿に場所を移し、直会（なおらい）が催され、参加者は、歓談のひとときを過ごした。

今年 銅像建立30年に

中野先生の銅像は、昭和五十九年十月二十七日に、完成除幕式が行われた。七百人もの人が参列する盛大なものだった。今年、平成二十六年は建立三十周年を迎える。

銅像建設は、玄洋社記念館創設者で中野先生の秘書でもあった元福岡市長、故進藤一馬先生によって実現した。

進藤先生は、戦後間もなくから「正剛会」を主宰して中野先生の顕彰事業を行い十三回忌に当たる昭和三十年三月に、銅像の向かって左側に建つ顕彰碑を建立された。

年月がたつうちに、崇敬者に「中野先生の在りし日の雄姿を形に残してもらいたい」「顕彰碑だけでは画竜点睛を欠く思いを禁じ得ない」との気運が高まった。進藤先生は、中野先生没後四十年事業として銅像建設をスタートさせた。

昭和五十八年十月の「中野正剛先生四十年祭」で進藤先生を会長に「中野正剛先生銅像建設期成準備会」が発足し、銅像建設は始動した。

「期成準備会」は十一月に「期成会」に移行し募金活動が開始された。全国津図浦々、各界各層から拠金が寄せられた。銅像の制作は当時、九州造形短大学長で、平成十七年度の福岡市文化賞を受賞した木戸龍一氏に依頼された。

銅像は高さ三メートル。台座は高さ二・五メートルで幅が一・五メートル、奥行き一・四メートル。台座の背面には中野先生が愛した孟子の言葉の一節「豪傑之士雖無文王猶興」が刻まれている。

筑前風濤録

頭山満と玄洋社

〈1〉

題字は進藤一馬福岡市長

柳　猛直

連載のはじめに

幕末から明治末年に至る半世紀は、わが国がかつて経験したことのない〝疾風怒濤〟の時代であった。争乱、政権交代、内戦に続いて国運を賭した外国との戦争を二度も行っている。

この間、日本は新興国として近代化の道を突っ走りながら、一方では旧藩時代の意識を捨てることが出来なかったのである。

薩長土肥の藩閥政府の砦（とりで）は堅く、藩閥以外の余人を近づけなかった。特に冷遇されたのは戊辰戦争の当面の敵・奥羽列藩であり筑前藩であった。

奥羽諸藩の場合は中心になった会津藩主・松平容保（まつだいら・かたもり）が幕末の京都守護職として尊攘浪士を痛烈に弾圧したことに対する報復の意味も多分にあったのだが筑前の場合は、さまざまの不運な要因が重なって結局は冷や飯を食わされる羽目になったのである。

「野（や）に遺賢なし」という言葉がある。賢人を野（民間）に置いたままにせず、あげて官に用いるということである。

これは、ある意味では〝官〟の側の都合のいい考え方で、遺賢が野にあって政府を批判したり反政府の行動をとることを封じてしまうことでもある。

「明治政府は野に遺賢を放置しなかった政府である」という評価があるが果たしてそうだろうか。

明治政府は前述の通り特定の藩士に対して官への門を堅く閉ざしていた。その好例がある。明治初年、福

節信院

司書公らを追悼

筑前・黒田藩の勤皇派弾圧事件「乙丑の獄」で犠牲になった同藩家老、加藤司書公と勤皇党諸烈士の追悼会が昨年十月二十五日、福岡市博多区御供所町一一の司書公の菩提寺、節信院で齋行された。司書会会員ら約七十人が参列した。例年、司書公の命日の同日、齋行されている。（一面参照）

喜納浩一住職の読経、参列者の焼香、祭文朗読で慰霊した。続いて筑前琵琶旭会代師範、米村旭翔師が「加藤司書」を献奏、尺八琴古流明暗流会員が「虚空鈴慕」を献笛、筑前今様道場「宰都館」会員が「加藤司書公」を献吟した。

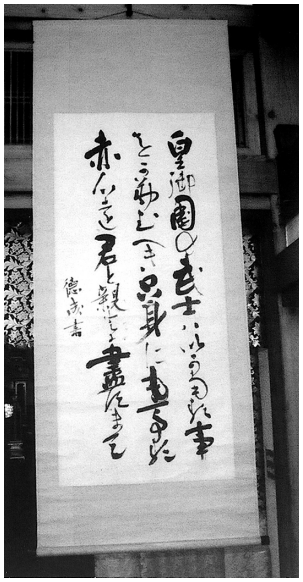
筑前琵琶を献奏する米村旭翔師

締めくくりに、明治維新史学会会員の力武豊隆さんが「加藤司書公の死生観について」と題して講演した。

乙丑の獄では八人が切腹を命じられたが、特に司書公には世間の同情が集まった。それはなぜか―力武さんは、司書公が切腹直前に詠んだ辞世の句「君がため尽す赤心　けふよりは　猶いやまさる　武士の一念」を引いて「他の人々が、自分自身の人生や家族のことを詠んでいるのに対し、最後まで主君への忠誠を貫いた司書公の態度は党派を超えて感動を呼んだ。尊敬された理由の一つといえる」と解説した。

「今様」の書を紹介

追悼会では、祭壇の脇に一幅の掛け軸が掲示された。司書公の筆で「皇御國（すめらみくに）の武士（もののふ）は…徳成書」と記されている。



祭壇の脇に掲示された司書公の書の掛け軸

元治元年（一八六四年）七月十九日の禁門の変で、幕府が発令した第一次長州征討令が司書公の働きで中止された折、司書公が部下との祝宴の席で作り朗吟した筑前今様である。民謡「黒田節」として今に伝えられている。

掛け軸は、同市城南区鳥飼五丁目、吉田朋春さん（67）の所有。福岡市総合図書館に寄託されているが、追悼会を機会に吉田さんの意向で披露された。

吉田さんの祖父、良春さん（昭和十四年没、享年74歳）は宗像市の出身で、東京英語学校に進学して郷土の先輩、元老院大書記官、早川勇のもとに寄宿。早川勇は筑前勤皇党の一員で司書公の下で行動し、乙丑の獄では斬罪になるところを藩主、黒田長溥公の配慮で免れている。こうした関係から吉田さんは、掛け軸は良春さんが早川勇から頂いたものと推察している。

書は版刷りの複製らしいが、総合図書館は「原書の所在が不明なだけに貴重な資料」であり「色紙などに書かれたものは多いが、これほど大きなものは珍しい」と評価している。

〜〜〜〜〜〜〜〜

◆加藤家先祖の物語を出版

加藤家に連なる米国在住の画家加藤睦子さん（70）が、鎌倉時代から隆盛を誇った先祖の大坂摂州伊丹家・加藤家が黒田藩の福岡に安住の地を得るまでを描いた小説『急ぎ御文参らせ候〜寶樹院殿悲話哀話』を上梓した。

加藤家初代・又左衛門重徳（伊丹氏から改名）が、有岡城（伊丹市）に幽閉された黒田官兵衛に、牢番頭として丁重に接する下りなどは、官兵衛ブームの折から特に興味を引く。司書公は、加藤家十一代目。

定価二千円（税別）。問い合わせは節信院（092・281・4182）へ。

岡藩からアメリカに留学した金子堅太郎と団琢磨（だん・たくま）は金子がハーバード大学で法律を修め、団はマサチューセッツ工科大学で鉱山学を学んで帰国した。

政府は人材を求めていたのだが、金子も団も筑前人であるということだけで門前払いを食っている。二人は意気消沈して「もう一度アメリカに帰って向こうで就職口を探そうか」と真剣に相談したという。（金子は後に伊藤博文に見いだされて憲法起草にも参画することになる）

明治初年には藩閥政府から離脱して野に戻った遺賢たち（江藤新平、前原一誠、西郷隆盛）を仮借なく処断している。

遺賢たちが言論によって政府を批判することも許さなかった。その中で敢然として藩閥政府批判の声をあげ続けていたのが頭山満を中心とする筑前玄洋社の野の遺賢たちであった。

もちろん藩閥政府は野の声を聞くために遺賢を放任して置くほど寛仁大度ではなかったから、玄洋社は弾圧に抗し、風濤に逆らって〝野の遺賢〟の存在を主張し、政府も渋々、認めざるを得なかったのである。

明治時代は浪人という名の野の遺賢が活躍した時代であったが、中に大陸浪人といわれる、いかがわしい一群が利権あさりに狂奔していたことも事実である。

明治四十四年（一九一一年）に辛亥（しんがい）革命が成功した直後、孫文に招かれて中国に出かけていった頭山の一にらみで利権あさりの大陸浪人は姿を消してしまった。浪人の頭領・頭山満はそういう存在でもあった。

「筑前風涛録」連載の意図は玄洋社と頭山満以下のそうした事績に改めて光をあてようというものである。

※この連載は地方史家、柳猛直（たけなお）氏（大正六年〜平成九年）が昭和五十七年三月一日からフクニチ新聞に執筆されたものを、ご遺族の了承を得て再掲するものです。題字は、故進藤一馬先生の揮毫です。

本の紹介

田中健之著『靖国に祀られざる人々』
名誉なき殉国の志士たちの肖像

（2013年7月、学研）

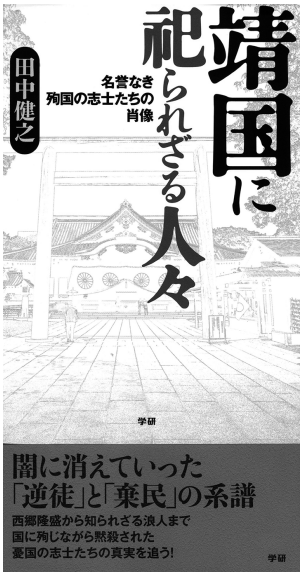
石瀧　豊美

田中健之は私の年下の友人である。この本の著者紹介によると年齢は私と十四歳違う。初めて会った三〇年ほど前、田中は理系の大学生だった。アジア主義関係の多くの文献・基礎史料を収集し、熟読し、同年代の誰よりも豊富な知識を持っているように見えた。それに容貌に風格があり、すでに老成した雰囲気を具えていた。私が『玄洋社発掘』を発行した直後ぐらいの頃だろう。

田中の曾祖父は玄洋社三傑の一人平岡浩太郎で、平岡の兄の子（甥）が黒龍会を創設した内田良平である。平岡家のお一人、東京大学教授（フランス文学）平岡昇氏とは文通していて、平岡氏が平岡浩太郎伝の執筆を志しておられたことを知っていた。平岡氏亡き後、未完の平岡浩太郎伝は、やはり親族の二村能史氏（元福岡県立美術館長）が情熱を燃やしておられたが、道半ばで逝去された。

田中はむしろ黒龍会や内田良平の研究に業績を積んできたが、平岡浩太郎伝は当然ライフワークになっていることと思う。今、田中は不定期に『歴史群像』（学研、隔月刊）に昭和維新や終戦関係の史実を掘り起こしたノンフィクションを連載している。その視野の広さ、史料解釈の確かさは驚くばかりで、田中ならではの一分野を開拓した、すばらしいレポートとなっている。

本書＝**写真**＝は靖国神社をテーマとしているが、ふつうならば祀られている人たちに目を向けるところが、祀られていない人たちに目を向けているところに新しさがある。



靖国神社参拝をめぐっては国内でもイデオロギーの対立があり、東アジアの外交上もしばしば紛議の的となる。本来は「慰霊」という心のあり方のはずなのに、不幸なことである。我が国の伝統では「一木一草に神宿る」と言い、山や岩や石が御神体であり、神道の葬儀では人は死すと神になる。このような日本の伝統が外国人に容易に理解できるとは思えない。互いの文化を尊重するとともに、我が国の神道葬について理解を深めてもらう努力も必要なのだろう。

先日青山霊園を訪ねたが、ここでは神道式に二礼二拍手一礼で故人を参拝する。福岡藩主黒田家の代々は藩祖如水（官兵衛）がキリスト教式で葬儀を行ったとされ（崇福寺には墓碑ではなく記念碑がある）、初代長政以下一〇代斉清までは禅宗（臨済宗）の崇福寺が菩提寺となっている。ただし、二代忠之、三代光之、八代治高の三人は真言宗の東長寺、一一代斉溥（長溥）は青山霊園に祀られて鳥居も建てられている。したがって斉溥は神であって、戒名がない。福岡市西公園の光雲（てるも）神社は如水と長政を祭神とする。もともとは福岡城本丸にあった水鏡権現と聖照権現を合祀したものである。如水の戒名龍光院殿、長政の戒名興雲院殿の各一字を採って神社名としている。

さて、田中によると、靖国神社の御祭神は幕末以来、国事に斃れた志士や官軍の戦死者など二五〇万柱。しかし、「同じ状況下で亡くなった者でも、靖国神社には、神として祀られる者と祀られない者とがある」。新選組は祀られないが、新選組から分裂した御陵衛士の伊東甲子太郎は祀られている。偽官軍とされた赤報隊は祀られていなかったが、隊長相楽総三は後に祀られることになった。

朝敵会津藩士は祀られていなかったが、禁門の変で朝廷を守護して戦死した会津藩士は祀られるようになった。同じ士族反乱（田中は「乱」を避けて「変」で通している）でも、佐賀の変・秋月の変・萩の変・福岡の変、そして西南戦争の参加者は祀られていないが、敬神党の熊本神風連の変の太田黒伴雄らは祀られているという。これらの事実から田中は合祀される人の基準が「時代や、政府の方針によって変化していること」、「いささか不公平なきらいがあるのは、政府のご都合主義の結果」とみている。ここでいう「政府」はむろん戦前の話である。

靖国神社は元々は東京招魂社という名称だった。福岡では現在の東公園に妙見招魂社と馬出招魂社があり、勤王の志士と戊辰戦争の戦死者が分けて祀られていた。これらは現在の福岡県護国神社に統合されている。一方、近くに松原招魂社があって、こちらは福岡の変の戦死者・獄死者・刑死者を祀っていた。田中はここで「賊の招魂祭」が行われていたという中野正剛の回想を引用している。これも現在は平尾霊園の「魂の碑」として合祀され、招魂祭は今も続いている。

本書は序章を含む六つの章から成る。

序　章　靖国に祀られざる人々の系譜
第一章　尊皇攘夷の大義
第二章　第二維新の志士
第三章　自由民権の風雲
第四章　アジア独立を目指して
第五章　昭和維新と下克上

言い換えると、幕末期、明治維新期から、昭和戦前・戦中期、終戦までを視野に入れて、同じように国事に斃れながらその生涯が省みられない人たち、「幕末から終戦に至るまでの逆徒と棄民を語る」靖国神社外史として意図されたのが本書である。正史に取り上げられることのない人物史・運動史として、かっこうの近代通史となっている。

玄洋社物故者を慰霊

「頭山満翁並びに玄洋社物故者慰霊祭」（財団法人明道会主催）が昨年十月六日、玄洋社墓地がある福岡市博多区千代四の「崇福寺」で齋行され、約三十人が参列。読経、焼香で玄洋社先覚の遺徳をたたえ慰霊した＝**写真**。

同会の山崎拓理事長は挨拶で「我々の後継者の育成に努めたい」と述べた。

「励志会」例会を開催

進藤一馬先生創設の勉強会「励志会」の年に一度の例会が昨年11月22日、福岡市中央区大名の水炊き店「岩戸屋」で開催された＝**写真**。

19人の出席があり、近況報告や思い出話に花が咲いた。喜寿の花田勲さん（玄洋社記念館理事）に記念品が贈られた。

頭山翁ゆかりの「和楽路会」

参詣旗を寄贈

役目終え玄洋社記念館に

緒方竹虎先生揮毫の参詣旗

〝九州のお伊勢さま〟として、かつては筑前領内一円の信仰を集めた福岡県糟屋郡久山町猪野の「伊野皇大神宮」＝豊丹生（ぶにゅう）康仁宮司（60）＝に毎年、徒歩で参詣を続けていた「和楽路（わらじ）会」＝会長、大神研裕・福岡市選挙管理委員会委員長、元福岡市議会議長（77）＝が、半世紀以上前から参詣の際に掲げていた元自由党総裁、緒方竹虎先生（玄洋社社員）揮毫の旗を玄洋社記念館に寄贈した。

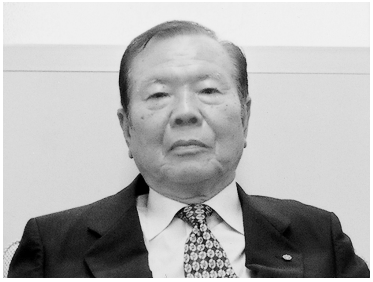
「和楽路会」が一昨年から休会し、旗は一定の役目を終えたことから、静かに休んでもらうことになった。

旗は縦一四四㌢、横八〇㌢。「天下太平万民和楽」と二行に墨書されている。日付に「昭和三十一年正月」とある。自由党、民主党の保守合同を成し遂げ、総理を目前にした緒方先生の、一月二十八日に急逝される直前の揮毫と推察される。

「和楽路会」は、毎年四月二十九日の「昭和の日」（昭和天皇の誕生日）に、福岡市東区の多々良農協を出発点に、旗を掲げ約八㌔を歩いて「伊野皇大神宮」に参詣した。

参詣がすむと、一行は同神宮の前を流れる五十鈴川（猪野川）そばの公園で食事を取り歓談のひとときを過ごした。

玄洋社記念館初代理事長の進藤一馬先生、二代理事長の妹尾憲介先生、信仰厚かった藤野正人・元福岡市議、桑原敬一・福岡市長、地元の小早川新・久山町長（いずれも故人）らも加わり、多いときには二百人もが参詣した。博多祇園山笠の当番法被に似たそろいの法被も作って、みんなで着用し、参詣の意義をいっそう深めた。



大神研裕会長

「和楽路会」は、頭山満翁が創設した。

明治四十年の同神宮式年遷宮の折、同神宮は造営費の奉賛を博多（福岡市）方面に依頼した。川端の漬物屋金山堂主人、八尋利兵衛と対馬小路の石蔵秀次郎という人が、早速、千人講を組織。二、三二六人の講員を集めて同神宮に「千人詣り」をした。

これを機に博多と同神宮の縁が深まり、昭和十一年には頭山翁が自ら「和楽路会」を組織して参詣した。

「和楽」は「皆がそろってなごやかに楽しむ」こと。履く〝わらじ〟と結びつけた命名だ。それ以後「和楽路会」は継続し途中、小早川町長が「毎年、四月二十九日」を参詣の日に決めた。

賛助会員芳名録

（11月10日現在・敬称略）

▼個人の部

【二万円】

山嵜　泰生　（那珂川町）

【一万円】

行武　治　（福岡市）

坂上　知之　（奈良市）

福田　明彦　（福岡市）

午 謹賀新年
平成26年元旦

建設コンサルタンツ
建設事業の計画・調査・測量・設計・施工管理
ジーアンドエス・エンジニアリング株式会社
代表取締役社長　花田　勲
専務取締役　児玉和久
本社　福岡市博多区東比恵三丁目二四－九
〒八一二・〇〇七電話（092）481－3100
東京支社　東京都杉並区高円寺南一－二三－一
〒一六六・〇〇三電話（03）5378－5800
営業所　千葉・浦和・神奈川・山口・佐賀・北九州・大分・長崎

福岡鮮魚市場のコア企業!!　21世紀の水産業界を領導するアキラグループ
◇鮮魚仲卸業◇
株式会社　アキラ水産
AKIRA Oh. Fresh! Sea foods.
代表取締役社長　安部泰宏
本社　福岡市中央区長浜3丁目11－3－711
電話092－711－6601（代表）
関連会社／株式会社コウトク水産

損害保険コンサルタント
太宰府天満宮前駐車場
漢方薬相談　とおりゃんせ
(有)日産企画　大江田信
薬剤師　大江田美子
〒818-0117
太宰府市宰府三丁目四－二十一
☎〇九二－九二四－六二九六

造園・緑化　自然とコミュニケーション
株式会社　別府梢風園
代表取締役社長　別府壽信
BEPPU
本社　〒813-0025 福岡市東区青葉一丁目六－五三
TEL〇九二－六九一－〇六七八(代)
FAX〇九二－六九一－四五五四
E-mail : info@shoufuen.co.jp

(財)日本医療機能評価機構認定
――開放型病院・臨床研修指定病院――
特定医療法人
原土井病院
HARADOI HOSPITAL
理事長　原寛
〒813-8588
福岡市東区青葉6丁目40番8号
☎092-691-3881(代)
http://www.haradoi-hospital.com/

玄洋社関係史料の紹介

同時代から見た頭山満 ③

ー書と人物ー

石瀧　豊美

第59回

隣町（福岡県糟屋郡粕屋町）の歴史資料館で『父と子　日米に別れて生きた九十年』という本の存在を教えられました。私家版で平成三年（一九九一）に発行されたものです。著者は安河内隆介氏。当時九十三歳でした。

資料館の担当者はこの中に頭山満についての記述があるので、私に有用ではないかと考えて、その部分だけコピーしてくれました。私は全体を読んで見たいと考え、特別に借り出させてもらいました。頭山満のことも教えられるところがありましたが、驚いたことに隆介氏の父喜三（きそう）は私の住む町（同郡須恵町）の出身でした。

なぜ日米に別れて生きたのか、という事情も詳しく書かれていました。私の住む町に生まれた原田喜三は、隣町の安河内家の婿養子になります。明治三十九年（一九〇六）、数え年三十四歳で渡米し、コショウ栽培で成功してコショウ王と呼ばれるまでになりました。

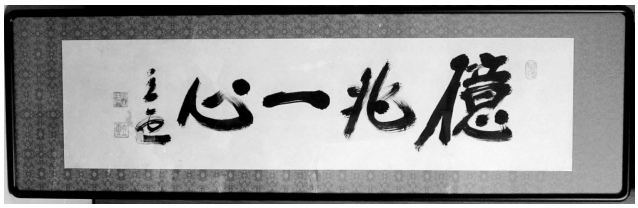


写真１　扁額「億兆一心」

カリフォルニア州サンディエゴ郡サンマーコス市に、その死後、功績を称えて、喜三の名を冠した道路があると知りました。

喜三はアメリカに移民し、日系一世として生涯を全うしましたが、その子・隆介氏は中学修猷館から早稲田大学に進み、富士紡績に入りました。やがて太平洋戦争が始まり、喜三一家は他の日系人がそうであったように、収容所へ送られます。隆介氏は陸軍省からビルマに派遣されますが、輸送船が米軍に沈められ、九死に一生を得て帰還します。父と子が日米に別れ、敵対する国に引き裂かれて、共に運命に翻弄されていきました。

さて、昭和十七年（一九四二）十月、富士紡の中津工場長をしていた隆介氏は「頭山先生の一行二十人が宇佐八幡宮に戦勝祈願され、耶馬溪に投宿されたことを知り」挨拶に行きます。

福岡師範学校第一回卒業で、県下教育界の重鎮だった柴田文城という人物がいます。中野正剛と緒方竹虎が福岡師範付属小学校在学中、校長だった柴田の薫陶を受けたことはよく知られています。福岡教育大学付属小中学校（西公園下）には柴田文城の銅像が建っています。文城は、頭山満の姪の夫で、かつ、隆介氏の妻の伯父です。文城は隆介氏の妻の妹（実姪）を養女としていたので、形式的には、頭山満の義理の甥が文城、文城の養女の義兄が隆介氏となります。そんな関係で頭山と隆介氏は文城を介して面識がありました。

写真２　関防印

突然の訪問に驚いた頭山に、ここで何をしているのか、と問われた隆介氏は、絹紡工場をしていますと答えました。正確に引用するとこうです。

「絹紡工場といいますのは以前は屑繭（まゆ）がたくさん出るがそれを廃棄していたのを集荷し、これを原料にして処理して立派な絹織物に活用しています。このほか野蚕といって植物で直接育つものも集めています」

感心した頭山は福岡に直行する予定を変更して「お前の工場を視察する」と言い出します。急きょ頭山を迎えることになった工場は、事務所の配置を替え、白布を敷き、頭山と峰尾夫人の席を中心にした清楚な式場をもうけました。市長、警察署長にも連絡し、厳重な警戒がしかれ、市長・署長ともに工場で出迎えています。こうしたエピソードにも頭山の名声がうかがわれます。

頭山は実は体調をくずしていたのですが、それでも工場見学を選びました。隆介氏が肩を抱えて歩調を合わせ、一時間ほど工場を視察する中で、いろいろな質問をしました。この時の印象を隆介氏は次のように書いています。

「それまで単なる豪傑と考えていたことが間違いであることを知った。戦時下のわが国の産業経済をよく研究されていたからである。」

頭山の身近に接した人の、こういう感想が貴重です。そもそも隆介氏は戦後四十五年を経て、頭山の真価を知る人が少なくなったからと、この証言を残したのでした。「先生の真髄に触れることが出来たのは生涯の大きな思い出の一つとなった」と述べています。

写真３　「立雲」の落款と姓名印（白文）・雅号印「朱文」

翌日、隆介氏は会社で作った富士絹二反を持って、福岡市西新町の頭山の生家・筒井家を訪ねました（現在は西新プラリバ〈旧・西新岩田屋〉の敷地となっています）。頭山は六、七人の揮毫依頼に筆を執ろうとしませんでした（体調不良が続いていたためでしょう）。しかし、隆介氏が会社の講堂に一枚、私個人に一枚、扁額の揮毫をお願いしますと申し出ると、「先生は毅然として筆をとられ、ご令息方の介添えを受け、会社には『繊維報国』、私には『不動如山（動かざること山の如し）』と鮮かに大書して下さった」。頭山満は二年後に九十歳で亡くなりますが、八十八歳で旅行をするだけでも、当時としては信じられないほどの頑健さと言えるでしょう。

富士紡中津工場講堂の頭山の額はいったいどうなったでしょうか。中津工場は火災で焼失し、残念ながら現存していません。

頭山の宇佐神宮参拝と中津工場見学は地元紙が詳しく報じているのではないかと思い、中津市立小幡記念図書館に問い合わせてみました。当時の大分合同新聞を調べてくれたのですが、該当する記事は見いだせませんでした。もう一方の額「不動如山」は、隆介氏のお子様である公二氏が、今も所蔵されているとのことです。

※安河内公二様、粕屋町立歴史資料館、中津市立小幡記念図書館のご教示・ご協力に感謝します。

［写真説明］

写真１は石瀧蔵の扁額「億兆一心」（立雲書）です。**写真２**は「億」の右肩に押された印（関防印または引首印）。何と書いてあるか読めないのがふつうですが、幸い藤本尚則著『頭山満翁写真伝』巻末に印譜を収めていて、印の由来を説明しています。「以虚受人」と読み、印材は鯨の骨です。**写真３**は「立雲」の署名（竹筆の特徴が出ています）と、上が姓と名を記した白文印（陰刻）、下が雅号を記した朱文印（陽刻）です。この三顆の組み合わせが最も目にふれやすいものように思います。